

## バルト的恋愛主体についての一考察（2）

### 『恋愛のディスクール・断章』と 「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」

滝沢 明子

#### はじめに

バルト的恋愛主体の特徴を考察するにあたり、拙論<sup>1</sup>「バルト的恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」」において、バルトが提示する恋愛主体が「ユニセックス」そして「子供」といった性質を与えられていることを論じた。『恋愛のディスクール・断章』（1977）、そして「ロマン派の歌」（1977）をはじめとするロマン派の音楽論を通して、ひたすら純真無垢な情動につき動かされているバルト的恋愛主体の恋愛感情は、母親を恋い慕う子供の情動に重ねられる。『恋愛のディスクール・断章』において、バルトはしばしば大文字の「母」「子供」を象徴的に用いて、恋する人およびその愛の対象となる人をあらわしていた。バルトの描きだす恋する人については、イノセントな恋情を持っている限りにおいて、社会的、一般的な年齢区分は問題とならない。性別区分にも、セクシュアルな文脈にもとらわれることなく恋愛主体を語ることが可能するのが「子供」である。

本稿はこの議論を前提としており、上に述べた拙論の続編という位置づけである。そして、『恋愛のディスクール・断章』において、バルト的恋愛主体が、大人でありながら子供である、という二重性をもって現れている点に注目するものである。忘れてはならないのは、「子供」としての恋する人は、まったくの子供のような存在ではないということだ。バルト的恋愛主体としての「子供」とは、子供と同時に大人である存在であり、それゆえ倒錯的なのである。恋している人物においては、大人の身体と子供の情動が共存しているのである。こうした二重性は、「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」（1978）という年齢区分を廃することについてのテキストとあわせて考察する

---

<sup>1</sup> 拙論「バルト的恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」」、『仏語仏文学研究』第28号、東京大学仏語仏文学研究会、2003年。

ことができる。最終的に、バルト的恋愛主体は、「子供のような老人」であると同時に「老人のような子供」として「年代」という社会的分類から自由であるというのだ。さらに「ロマン派の歌」や「長い間、私は早くから床に就いた」(1978)といったエッセイでの記述を総合していくと、じつはバルトは恋愛主体を語ることで、年齢や性別といった分類にかんする社会的拘束から自由であることの価値を説いている、ということがみえてくるだろう。

バルト的恋愛主体についての考察を深めつつ、バルト恋愛論の射程をさぐることが本稿のねらいとなる。

## 「子供」と「大人」の二重性

### 「欲望」と「必要」

『恋愛のディスクール・断章』のなかで、恋する人が「子供」的な情動に従って行動していることは、前述した以前の論考においてすでに示された。しかし、だからといって彼／彼女が大人としての欲望から解放されているわけではないことも忘れてはならない。拡散的な全身的官能にもとづくときられる子供の情動と、より性的な性質を帯びており、性的なものに由来する、大人の欲望とがある。恋する人とは、それら二つのあいだを行き来する存在なのだ。つまり、同時に子供であり成人でもあるのだ。

たとえば、「不在 (ABSENCE)」というフィギュールが扱われる断章では以下のような表現がなされている。

不在は欠乏のフィギュールである。まったく同時に、私は欲望しかつ必要としている。欲望は必要のうえでつぶれてしまう。これは恋愛感情の強迫的な事実である<sup>2</sup>。

そして、この文章に続き、ルスブロック<sup>3</sup>を引用しながら次のような考察がなされている。

(« 欲望はそこにあつて、燃え上がっており、果てしが無い。しかし「神」は欲望よりも高きにあり、「欲望」の高くかかげた腕は、崇められた十全性には決

<sup>2</sup> Roland Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, in *Œuvres Complètes*, t.V, Éditions du Seuil, 2002, p. 44. 以下、本論文中のバルトの引用はすべてこの刊本にもとづく。

<sup>3</sup> バルトは Rusbrock としているが、一般的には Ruysbroeck (Jean)と表記される、14世紀フランドルの神秘主義者。

して到達しない」。「不在」のディスクールは二つの表意文字からなるテキストである。「欲望」の高くかかげた腕と、「必要」の差し伸べた腕とがあるのだ。私は高くかかげた腕のファロスのイメージと、差し伸べた腕の託児所的イメージのあいだを行き来し、揺れ動く<sup>4</sup>。）

「不在」のフィギュールにおいて、恋する人は「欲望」と「必要」の双方を同時に感じている。「欲望」の高くかかげた腕と「必要」の差し伸べた腕とはそれぞれ「ファロスのイメージ」と「託児所的イメージ」と言い換えられており、「欲望」と「必要」は恋愛主体の「大人」的側面と「子供」的側面に対応していることが分かる。二つのあいだを「揺れ動いている」という表現からは、恋愛主体の二重性がみてとれる。すなわち、大人の性的欲望を持った存在と、「必要」とよばれる身体、感情の両方に根ざした子供としての官能的情動にとらわれている存在、という二重性である。

「欲望は必要のうえでつぶれてしまう」という一文からは、バルトが大人の感じる「欲望」よりも子供の感じる「必要」を恋愛におけるより本質的な感覚だと考えていることが推測される。だが、重要なのはバルトが必ずしも大人の性的な「欲望」を否定したり排除したりはしていないことである。『恋愛のディスクール』において、恋する人の「子供」的側面がとりわけ強調され肯定されている。これは、恋愛を語るさいの一般的な文脈において大人の「欲望」はすでに社会的にも当たり前のものとして認められているからであろう。バルトは現代社会で抑圧されているという「子供」の情動を救いだそうと試みている。よって、恋愛主体の「子供」的側面である純粋な情動が多く語られることとなるのだが、彼／彼女は子供そのものではないのであり、「欲望」を持たない存在ではない。恋する人とは、大人の身体の中に「子供」の官能的情動を備えているのである。

### 「やさしさ」

大人の「欲望」と子供の「必要」とのあいだを行きつ戻りつする恋愛主体の様子を分析した断章はいくつか存在する。「やさしさ (TENDRESSE)」および「抱擁 (ÉTREINTE)」をとりあげてみたい。まず、大人としての恋する主体のうちに「子供」が立ち現れる瞬間が描かれているのが、「やさしさ」のフィギュールである。バルトは以下のように「やさしさ」を語り始める。

それはやさしさを必要とすることだけではなく、相手にやさしくすることの必

---

<sup>4</sup> *Fragments d'un discours amoureux*, p. 44.

要でもあるのだ。私たちは相互的な善意のうちに閉じこもり、お互いに母親のように接しあう。私たちはすべての関係の根に回帰するのだ。そこは、必要と欲望とが合流する地点である<sup>5</sup>。

「お互いに母親のように接しあう」ということは、逆にいえば、それぞれが相手の子供であるかのように振舞うことである。互いに相手の「母親」であり、かつ「子供」であることが成り立っているとき、恋する人は「子供」として原初的な充足感を得ることができるだろう。そのような状態において、「欲望」と「必要」とが合流する地点に戻っていくことは、幼かった頃にかえっていくという意味合いであると考えられる。そうすると、根の部分では結びついているという「欲望」と「必要」は、もともと一つの感覚だったものがだんだんと枝分かれしていったということになる。乳児や幼児においては、性的「欲望」と拡散的官能への「必要」とは渾然一体となっている。だが、成人になるにつれ、「欲望」は性的なものへと収斂され、より全身感覚的な「必要」とは切り離されたものとなっていくのである。

さて、先ほど論じたように、このような、お互いがお互いの「母親」となり「子供」となるような満たされた瞬間においてさえも、恋する人は必ずしも完全なる「子供」ではない。先の引用には、次のような一文が続いている。

優しい身振りは告げている。あなたの身体を眠りにつかせられることは、何でも私に頼んでください。でも、私があなたを少しだけ、わずかに、何もすぐに捕捉したいと欲さずに、欲望していることを忘れないで下さい、と<sup>6</sup>。

母親のような「やさしい身振り」は、幼児的充足の象徴である「眠り」へと恋する人をいざなう。けれども、それと同時にかすかな「欲望」の存在をそっと主張している、というのだ。「母親」と「子供」の関係性のうちに充足していると同時に、「欲望」をわずかに表明する、という形態が、バルトの理想とする恋愛関係のあり方であろう。恋する人が抱く大人の「欲望」は、静かに表明される限りにおいて決して否定されているものではないのである。バルトは続けて以下のようにも述べている。

性的快楽は換喩的ではない。ひとたび捉えられれば、断ち切られてしまう。それは、一時的に、監視のもとで禁止が撤回されることによって、つねに終息する「祝祭」である。反対にやさしさは、際限のない、飽くことを知らない換喩

---

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 275.

<sup>6</sup> *Ibid.*

でしかないのだ<sup>7</sup>。

この箇所では、大人の側にある性的快楽は「祝祭」と呼ばれ、「子供」の側にある「やさしさ」と対比させられている。一時的な「祝祭」と、際限のない「換喩」である「やさしさ」とを並べることで、バルトは一般的に恋愛を語る文脈において軽視されている「やさしさ」の豊かさを強調している。「欲望」をそなえた大人でありながら、自らのうちに「子供」を存在させている点が重要なのである。大人として生きると同時に、「子供」でもある、その二重性が恋する人の特性である、といえよう。

### 「抱擁」

次に「抱擁」というフィギュールを扱った断章をみてみることにする。ここでもやはり、母子間の抱擁に象徴される「幼児的逸楽」と性的な抱擁が象徴する「欲望」とが対比させられている。そして、「やさしさ」の断章とは逆に、「子供」として充足している恋する人のなかに「大人」の欲望が起こってくる瞬間が描かれている。まず、母親の腕のなかで眠りにつく、という幼児的充足をもたらす「抱擁」のイメージが語られる。

交わり（そのときには、「想像界」などくそくらえだ）の他に、不動のからみあいとしての別の抱擁がある。私たちはうつとりして、魔法をかけられて、眠ることなき睡眠のなかにいる。私たちは入眠の幼児的悦楽のなかにいる。私を落ち着かせ、ぼう然とさせるのは、お話をしてもらう時間であり、声の時間なのだ。それは母への回帰である。（« あなたの腕のやさしい静けさのなかで »とデュバルク<sup>8</sup>の曲つきの詩はうたう<sup>9</sup>）。

交わるための「抱擁」はもちろん大人の「欲望」の側にある。それは動的であり、興奮である。その対極にあって、不動の安らぎをもたらすのが母子間の「抱擁」である。母親のような「やさしい身振り」が恋する人の身体を眠りへと導いたように、ここでもまた母親による抱擁は就寝のイメージとつながっている。幼児的なまどろみのなかにあっては、すべてが充足しているのだ。このとき、恋愛主体は完全なる「子供」に立ち返っているかのようである。よって、そこには「欲望」の現れてくる余地はないであろう。バルトは以下のように続ける。

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 275.

<sup>8</sup> Duparc、19世紀末に活躍したフランスの作曲家。

<sup>9</sup> *Fragments d'un discours amoureux*, p. 137.

この引き延ばされた近親相姦のうちでは、すべてが停止中である。時間も、規則も、禁止も。なにものも消耗することがなく、なにものも欲されることがない。なぜなら、彼らは決定的に満ち足りているようにみえるからだ<sup>10</sup>。

母と子の不動の「抱擁」においては、すべての「欲望」が満たされているようだ、という。これは、恋愛主体が「やさしさ」で述べられている原初的な充足感に到達している状態であろう。やはり「欲望」と「必要」とが合流する地点への回帰がなされたのであり、それによって恋する人は「子供」として「幼児的逸楽」に身をまかせるのである。

ここで、「やさしさ」において、母親のような「やさしい身振り」は眠りを保証すると同時に「少しの欲望」をもまたささやかに主張していたことを思い出そう。この「抱擁」というフィギュールにおいてもまた、完全に「子供」となったかにみえた恋愛主体のうちに、大人の側の「欲望」、すなわち「生殖的なもの」が舞い戻ってくるのだ。バルトはこのように語る。

しかしながら、この幼児的抱擁のただなかで、生殖的なものが必ずや発生してくる。それは近親相姦的抱擁のとりとめのない官能を断ち切る。欲望の論理が動き出し、捕捉願望が回帰し、大人が子供にオーヴァーラップする。私はそのとき、同時に二つの主体なのだ。私は母子関係と生殖関係を求めている。(恋する人は次のように定義されるだろう。勃起する子供、である。幼いエロスはそのようであった<sup>11</sup>。)

この「同時に二つの主体である」状態こそが、バルト的恋愛主体の特殊性である。「母子関係 (maternité)」を求める「子供」と、「生殖器の関係 (généralité)」を求める「大人」、という二つの主体である。注意したいのは、「欲望」が発生したからといって、幼児的な「とりとめのない官能」に大人の「捕捉への欲望」がとってかわるのではないということだ。どちらかがどちらかを排除するのではない。「子供のうえに大人がオーヴァーラップする」のだから。これが恋愛主体の二重性である。恋する人は、大人の身体を持っているにもかかわらず、「子供」でもある、という矛盾を生きているのである。

「隠す」

ここまでは「欲望」と「必要」の共存、という観点から恋愛主体にみられる大人／子供の二重性を論じてきた。別の局面でも、恋する人のなかで「大

---

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 137.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 158.

人」と「子供」がせめぎあうことがある、ということも指摘しておきたい。そこで、最後に「隠す (CACHER)」というフィギュールをとりあげてみる。ここでは、恋する人が同時に大人でありかつ子供でありたいと望んでいる様子が描かれる。

相手が気付いてさえないようなある偶発事のせいで、私が泣いたと仮定してみよう (泣くことは、恋している身体のノーマルな活動に属している)。そして、それが見つかないように、涙で曇った眼のうえに黒眼鏡をかけたとしよう (否定のよい例である。見られないように、視界を曇らせるのだ)。この仕草の意図は計算されたものである。私は禁欲主義、そして« 品位 » (私は自らをクロチルド・ドゥ・ヴォー<sup>12</sup>だと思ひこむ) の道徳的特権を保持していきたいのだ。そして同時に、矛盾しているが、やさしい問いかけ (« いったいどうしたの? ») を喚起したいのだ。私は憐れっぽくありながら、立派でありたいのだ。同時に子供であり、大人でありたいのだ<sup>13</sup>。

ささいなことが原因で泣いたことを気付かれまいとする行動 (黒眼鏡の装着) が、実は二重の意味を持っているという。恋する人は自らの情熱を隠そうとするが、同時に「隠していること」自体に気付いてほしいと願っているのだ。泣いた痕跡は、自分が恋をしていて苦しんだということ、つまり情熱の証拠である。相手に理由を告げるべきか、責めるべきか、さりげなく非難すべきか。大人の美德は、情熱を隠すことをよしとする。よって、恋する人は、自分は何事もなかったかのように振舞うべきなのだ、と結論する。そのようにして、きちんとした大人として、苦しみに耐えている自分を誉めてもらいたいと思っているのだ。

だが、恋する人のうちの「子供」は、「やさしさ」を求めている。泣いたことを気丈に隠しているからこそ、「どうしたの?」というやさしい言葉をかけてもらいたいのである。この二つの願望のあいだで、恋愛主体はやはり揺れ動くこととなる。涙の跡が発覚し、哀れな、「同情を誘う」存在になることは、「子供」であることに対応する。「立派」であるためには、大人の態度をとらねばならない。同情してほしいと思っていながら、立派でありたいと望んでいる恋する人は、つまりは「同時に大人でありかつ子供でありたい」と望んでいる存在なのである。どちらかを選ぶことは不可能だ。ゆえに恋する人は大人と「子供」のあいだを揺れ動いたり、あるいは「子供」となりながらも

---

<sup>12</sup> Vaux, Clotilde Marie, Mme De、オーギュスト・コントの友人であつたという女性。

<sup>13</sup> *Fragments d'un discours amoureux*, p. 73.

大人であることを否定せずにいる。よって、涙の跡にかんしては、母子的な抱擁のなかにほんの少しの「欲望」を表明したときのように、恋する人は「少しだけ情熱を見せる」ことにするのである。

以上に示したように、恋愛主体は、情動の面では「子供」として行動しようとするが、身体的欲望や美德への願望においては大人として生きようとする。バルトは恋する人と「子供」との同一化を何度も強調してはいるが、その大人性は決して排除していない。逆にいえば、大人であるからこそ「子供」となることの重要性が浮き彫りになるのだ。大人と「子供」のあいだを行き来している存在であること、これが、恋する人の二重性である。

ここでは、『恋愛のディスクール』に描かれる恋する人とは、大人でありながら、自らのうちに「子供」の存在を認めており、二つの存在のあいだを揺れ動いているものであることを確認した。次章からは、バルトが恋愛主体のこうした二重性を執拗に提示しかつ強調している背景にはいかなる意図が絡んでいるのか、同時期の他のテキストを参照しつつ考察していくこととする。

### 「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」

バルト的恋愛主体における大人／子供の二重性、という問題から、恋愛主体の年齢とはいかなるものなのだろうか、という問いが生じる。ところで、バルトは上のように題された短いテキストのなかで、「現代の学問のうちで唯一年齢について論じていない」という精神分析について、次のように言っているのだ。

それ（精神分析）にとって、人間は年齢をもたない。人はセクシュアリティの年齢しか持っていないが、それは発展的なものではなく、[...] 乳児期のはるか遠い夜に始まって、死ぬ瞬間までいつもそこにあるのだ。というのも、人間は生まれてから死ぬまでずっと感情を転移する（ずっと愛する）からである<sup>14</sup>。

この一節は先に論じた恋愛主体のありようを明確に説明している。「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」は、バルトが高等研究院で行っていた「恋愛のディスクール」の講義の未発表部分の抜粋である。ちょうど一つの断章と考えておかしくない長さともつテキストであるため、『恋愛のディ

---

<sup>14</sup> « Puer senilis, senex puerilis », p. 482.



スクール』を補うものとみなしてよいだろう。恋愛主体と年齢との関係を考えるにあたって、このテキストをみていくこととしよう。

「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」のなかで、バルトは社会的な拘束としての「年齢区分」を問題としている。社会においては、人は年齢に応じて分類され、何らかの世代に属することを強いられているという。冒頭、「分類 (Classement)」という部分は次のように始まっている。

幼児期、子供時代、思春期、青年期、中年期、老年期。すべての社会は人間主体の時間を分割する。そして、いくつもの年代をつくりあげ、分類し、名付け、その構造を成人式や兵役、あるいは法的規定といった方法で活動へと組み込む<sup>15</sup>。

幼児から老人にいたるまで、「人間主体の時間」とは、社会によって分割されている、という指摘がまずなされる。年齢による区分、すなわち「世代」というものは、実は社会が人間に対して暴力的に押し付けている逃れられない区分なのであった。「世代」に属することは、社会に組み込まれることなのである。その強制力は次のように述べられるとおりである。

構成された複数性 (« 人生における数々の年代 ») は、人間主体のうえに、被らねばならない最も強力な社会的拘束を重くのしかからせる (年齢、それはまさしく「他者」である<sup>16</sup>)。

そして、年齢の区分けを強いるのは、「医学、社会学、心理学、人口学、犯罪学、政治」、といった「客観的」言説である、とバルトは分析している。つまり、「世代」「年齢区分」といったものは主観的な感覚とはまったく関係がないところで、外側から振り分けられてくるものなのである。では、誰が何のために「年齢」という社会的拘束を存在させているのか。バルトの見解はこうである。

誰がいくつもの年代を欲しているのだろうか？ 古風な社会、戦闘的な社会、競争社会、要するに、あらゆる力強い社会だ。それらが、人類の利益を代表する権利を自らに付与するや否や、である。人類の利益とは、世代の流れを明確にし、コード化することである。それをコントロールし、一番よい生産性を保証するという願望にもとづいてのことだ。 (« 待ちなさい——私にとって代わるのならば »,あるいは« 私がその位置につくので、そこからどいてください »,

---

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 481.

<sup>16</sup> *Ibid.*

といったことが、年代の分類が科学的に述べていることなのだ<sup>17)</sup>。

「年代」を区分したがる社会の特徴は権力の論理によって動いている点にある。「人類の利益」を大義名分に、世代交代のシステムを支配する。そうした社会が目指すものは、「生産性」の向上なのであった。「年代」に属するということは、社会的区分を受け入れることで共同体内での自らの役割を果たし、その発展に貢献することなのだ。世代交代についての「科学的」「客観的」な言説は、「そこをどけ」という横柄で横暴な台詞の言い換えにすぎない。すべては権力にかかわることなのである。

では、そのような権力機構が付与する「年代区分」にそむくことは、何を引き起こすだろうか。前の引用に続く文章を追ってみよう。

あいまいな、未分化の、可逆的な年代よりも深刻な社会的無秩序はありえない。年代が無数にあるのだ。年代区分に逆らって生き、考えること、人間の役割を自由に置き換えること、高齢者のなかに思春期を、成人男性のうちに子供を見出すこと。そして、人口ピラミッドの段階にかえて、自分自身によって、内面からのみ分割されうのような安定した主体を、生まれた瞬間から死ぬ瞬間まで、同じ存在であり続けるような主体のイメージをおきかえること。これらのことよりも深刻な転覆はない<sup>18)</sup>。

きっちり区切られた「世代」に、年齢にしたがって自らをアイデンティファイし、社会的に規定されたように行動することがいわゆる「社会性」である。年齢的に「未分化」であること、すなわちどの世代にも属しておらず、自らのうちにいくつもの「世代」を内包している主体は、社会にとって脅威なのだ。世代が分かりやすく分類されているということは、それだけ権力に重きをおく社会にとって都合がよいことなのだから。「きちんとした社会人」は外見から年齢がいくつなのか、だいたい見当がつくだろう。しかし、いわゆる「自由業＝やくざな仕事」をしている人たちは往々にして年齢不詳の外見をしている。これは誰もが思い当たることだろう。社会的に記号化された身分に自己をアイデンティファイしていない人たちは、見た目では何歳なのか分からない、何の仕事をしているのか分からない、という場合が多い。そのことは大抵、彼／彼女らが、社会に提示された「年代」のシステムに沿って歳を重ねていないことに起因している。「あなたはもう××歳だから〇〇をしな

---

<sup>17)</sup> *Ibid.*

<sup>18)</sup> *Ibid.*

ければ」という圧力は、提示された年代区分に沿いなさい、という社会からの命令を「常識」という名のもとに世間の声が代弁しているにすぎないのだ。

そのような社会の強制にそむいて、老人が若者のように振舞ったり、成人男性<sup>19</sup>が自らのうちに子供の部分をそなえていたり、といったことは文字通りの「社会的無秩序」であり、価値の転覆行為である。外側から「客観性」の名においてやってくる年齢区分にしたがわず、自らの「内面性」にだけしたがって生きる。そして、生涯を通じて分類されることのない「一つの存在」としてある。そうした人間主体は、社会的拘束から自由なのだ。内面から区分された年齢とは、バルトが語る以下のようなものだという。

私の人生における年代を神話的に思い出すことがたしかにある。しかしそれは私の転移の（私の愛の）年代にすぎないのである<sup>20</sup>。

あの時は誰それを愛していた、別のときは違う誰それを愛していた、という基準のみで人生の時期を回想し区分することには、なんの社会的要素の入る余地もない。そればかりか、スキャンダラスな事態でさえある。外側から分類されない主体はつねに「社会性」から遠く離れてある。

では、そのような主体とは誰でありうるのだろうか。いかなる場合に人はそのような主体となりうるのだろうか。ここで「ロマン派の歌」を思い出してみたい。なぜなら、ロマン派歌曲で歌われる主体について論じたこのエッセイで、バルトは、その主体が社会的な区分や役割から自由であるということ論じていたからである。バルトは以下のように述べていた。

古代の農村社会の農民コーラスでは、男声は女声に応答していた。[...] われわれの西欧社会では、オペラにおける四つの声の音域を通して、圧倒的なのはエディプスである。家族全員が、つまり父、母、娘そして息子がそこにおり、逸話の迂回や役割の入れ替えがどのようなものであろうと、パス、コントラルト、ソプラノそしてテナーに象徴的に投射されている。ロマン派歌曲がいわば忘却するのは、まさにこれら四つの家族的な声なのである。それは声の性的な符号を考慮にいれないのだ。というのは、同じ歌曲が男にも女にも一様に歌われる

---

<sup>19</sup> バルトが特に「成人の男性」としているのは、このような差別にかんする問題は置いておくとして、女性は一般に子供っぽくあっても許される存在であると考えられていることからきていると思われる。

<sup>20</sup> « Puer senilis, senex puerilis », p. 482.

ことができるからである<sup>21</sup>。

農民コーラスにもオペラにも、社会的役割、特に性別と家族的な役割がついて回るのだ。年代による区分が問題となっているのではないが、社会によって割りあてられ押し付けられるという点においては、性別や家族的役割は「年齢」と同様の性質をもっているとみなすことができる。社会が人間主体に強いる「分類」についてのバルトの問題意識は一貫している。そうした社会的区分から、ロマン派歌曲の主体は免れているというのだ。だが、そのような主体となるためには、ある条件があった。

声の「家族」はなく、いうなれば、ユニセックスの人間主体があるだけなのだ——その人が恋をしている限りにおいて。というのも、愛——情熱的恋愛、ロマン派的恋愛——は、性別も社会的役割も特別扱いしないからである<sup>22</sup>。

性別、家族、あるいは年代といった社会的分類から自由であるには、恋をしている必要があったのだ。また、ロマン派の歌は歌手の内面から聞こえてくるのだとされている。ここでも、外側から与えられる区分にしたがわず、自らの内面にしたがって生きる主体が問題になっていたのである。

「ロマン派の歌の世界は、恋愛の世界であり、恋愛主体が頭のなかに持っている世界である<sup>23</sup>」とバルトは述べていた。ロマン派歌曲の主体はつねに恋愛主体なのである。同時に、ロマン派音楽論全体を通じて言えることは、バルトが恋愛主体をすべからく「子供」の性質をそなえたものとして語っていることであった。性においても未分化であり、社会的役割から限りなく外れたところにあるのが子供である。つまり、バルトは、ある主体が恋をしていて特権的に「子供」の状態を生きられるからこそ、社会的役割や性別による分割から自由でありうると考えているのだ。

ところで、ある主体が「子供」であることは、年齢区分から自由であることと関係している。年齢区分という社会的拘束を逃れている主体は、社会的無秩序を引き起こす存在である、とバルトが述べていることは先に確認した。ふたたび「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」に戻ってみよう。バルトはこのテキストにおいて、恋をすると年齢が消失してゆく、と述べているの

---

<sup>21</sup> « Le chant romantique », pp. 303-304.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 304.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 307.

である。「年齢は消え去る……」と題された章をみてみよう。

エロスは神話や小説、物語の中においてのみ必然的に若者のものである。人類の優生学的必要性のために作りあげられているからだ。（若くして愛し合ったので「彼らはたくさんの子供をつくりました」）。しかし、愛（恋愛の情熱）は年齢を特別扱いしない（それが性別も相手も特別扱いしないのと同じように）。あなたが何歳であろうと恋に落ちるだけでなく（神話は「恋をすると若返るのだ」といって切り抜けるが）、恋愛は魔術を解き放ち、すべての年代感覚を免除するのだ。恋愛主体は文字通り、いかなる年代にも当てはまらない（年代とは何なのかすら知らないのだ）。あるいは、恋愛主体は一度にすべての年代に属している。それは幼年のやさしさと晩年の倦怠とを予告なしに混ぜあわせて、時代を横切りながらぶらついているのだ<sup>24</sup>。

ともすると恋愛というのは若者に限った営みのように語られる。バルトが指摘している「年齢区分による差別」である。だが、恋愛物語のなかの主人公たちが多くの場合若者であるのは、「人類における優生学的な必要性」が原因なのだ。神話や小説のなかで結ばれるカップルのハッピーエンドが、「彼らはたくさん子供をつくりました」であることがそれを物語っている。年老いてから愛し合ったのでは（あるいは同性カップルでは）そうはいかない。よって、若者（異性愛者）ばかりが恋愛をするかのような誤ったイメージがうまれるという。だが、実際のところ、人は何歳であっても恋に落ちるのだ。「愛（恋愛の情熱）は、年齢を特別扱いしない」ということは、恋には年齢など関係ないということだ。同様に、性別も相手も関係ない、ということになる。恋する人が何歳であれ、男であれ女であれ、相手がどこの誰であれ、恋愛の情熱は変わらないのだ。恋愛主体であることは、性別区分にも、家族的役割にも、そして年齢にも縛られていない主体である、というわけだ。恋をするとき年齢は消え去る。それは、恋する人が大人と子供が重なりあった奇妙な二重性をもつ主体になるからではないだろうか。

ここではバルトはそのような恋愛主体を「老人ノゴトキ子供」と形容する。子供のようにであると同時に、大人びて老成しているということだ。

古代および中世のレトリックのトポスであり、若々しくかつ賢い、という神話的イメージである「老人ノゴトキ子供」のように、恋する人はこの少しばかりグノーシス的（ファウスト的？）な奇妙な一族の出である。矛盾するとされている年代を結びつけるのだ。彼は自らのうちに幼年期を保っており（想像界の、

---

<sup>24</sup> « Puer senilis, senex puerilis », p. 482

母性的な構造の影響力によって)、しかしながら、長きにわたる過去の果てに、死の傍らで、万事承知の上で、子供時代の陰で生きているのだ<sup>25</sup>。

ところで、この「老人ノゴトキ子供」というイメージは、バルトによるブルースト論にも出てきている。「*« 長い間、私は早くから床についた »*」のなかでバルトは次のように述べる。

徐々に私たちは、*« ブルースト »* (文学史のうちに掲げられる常用名)ではなく、奇妙な存在であり、同時に子供であり大人であり、老人ノゴトキ子供であり、情熱家であり賢く、エキセントリックな偏執のとりこでありながら、世界や愛、芸術、時間そして死についての気高い思考の場である、そんな*« マルセル »*を愛し始めるのだ<sup>26</sup>。

「子供」としての無垢な情動で相手を恋い慕っている、という点においてバルト的恋愛主体とブルースト的恋愛主体とが性質を同じくしている点については、前述の拙稿ですでに論じた。この引用からは、バルトの提示する恋愛主体がブルーストの主人公と似ていることが偶然ではないことが理解される。バルトは「マルセル」が「同時に子供であり大人である、老人ノゴトキ子供」だと明言しているのだ。たしかに、『失われた時を求めて』の主人公は一貫して年代をもたない。子供から大人へと、語り手は年齢を重ねているはずであるが、それぞれの場面では一体彼がどのような世代に属しているのかは全く問題とならないし判別がつかない。まさしく、生涯を通じて分類されることのない「一つの存在」である。もし語り手の年齢を区分するとすれば、「母を愛していたとき」「ジルベルトを愛していたとき」「アルベルチヌを愛していたとき」のように、内面から区分する以外の方法はないだろう。バルトはブルーストの語り手を強く意識しているだけでなく、自らの描きだそうとする恋愛主体がブルーストの主体であることに自覚的なのである。子供でありながら大人であるという二重性、「老人ノゴトキ子供」、こうした年齢をもたない主体は、バルトとブルーストに共通して見出されるモチーフなのだ。

## 社会的無意味性

大人と子供の二重性をその特質とするバルト的恋愛主体は、「老人ノゴト

<sup>25</sup> *Ibid.*, pp. 482-483.

<sup>26</sup> *« Longtemps, je me suis couché de bonne heure », pp. 464-465.*

キ子供」であることによって年齢をはじめとする社会的役割から解放されている。恋する人が社会からおりた存在であることは『恋愛のディスクール』でも言及されていた。たとえば、「ひとりきり (SEUL)」という断章では、恋愛主体と社会との関連はこうまとめられている。

自分の暮らすキリスト教社会に受けいれられていなかった古代の神秘主義者のように、恋愛主体として、私は立ち向かったり異議申し立てをしたりしない。単純に、権力、思想、科学、経営などなど、いかなる機関とも私は対話をしないのだ。私は必ず「非政治化」されているわけではない。私の逸脱とは、「興奮」していないことにある。お返しに、社会は私を公開の奇妙な抑圧のもとに置く。検閲も、禁止もない。私は人間的な物事から遠くにあつて、無意味性という戦術的命令によって保留されているのだ。私はいかなる目録、いかなる保護施設にも属していないのだ<sup>27</sup>。

恋する人は社会から無意味な存在とみなされる。ある種の迫害である。そうやって社会から隔離されているさまは、「古代の神秘主義者」に似ているという。恋する人も神秘主義者も社会の生産性にかかわるあらゆる「客観的」言説の外にあるので、積極的な否定を被ることはないにしろ、ひたすら無視されるのだ。

だが、無意味であることこそが、手に負えないことでもある。「狂人 (FOU)」のフィギュールを語った断章をみてみよう。

私は狂っている。私が変わっているからではなく（順応への野卑な策略）私があるゆる社会性から切り離されているからだ。他の人々が様々な度合いにおいて何かのために戦っているとする、私は何についても戦士ではないし、私自身の狂気とすら戦わない。私には社会性がないのである（人がしかじかの他人に対して調和性がない、というように<sup>28</sup>）。

恋する人の「狂気」は、彼／彼女が社会性から切り離されていることによる。恋する人の行為には社会に役立つようないかなる生産性もなく、恋する人の立場は社会に参画するためのいかなる枠組みにも入らない。恋愛主体であることは、必ずや「男」または「女」でなくてはならなかったり、「青年」や「中年」などといった世代区分に属していなければならない、そうしたことをいささか暴力的に強要する社会からの束の間の逃走なのである。闘争するので

---

<sup>27</sup> *Fragments d'un discours amoureux*, p. 261.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 157.

もなく、抵抗するのでもない。恋愛の情熱という倒錯によって、権力が押しつけてくる「一切のモラルの否認」は容易に行われてしまうのだ。ゆえに、恋愛主体の行いの無意味さは、社会にとって「手に負えないもの」となる。社会は恋愛主体を分類したり有意味性に回収したりする術をもたないからだ。

「不在」のフィギュールを扱った断章には以下のような一節があった。

(X...は私に、愛は彼を世俗性から守ってくれたと語った。党派、野心、昇進、計略、同盟、離脱、役割、権力から。愛は彼を社会の落ちこぼれにしたが、彼はそれを喜んでいた<sup>29</sup>)。

恋愛主体が行う価値観の転覆行為である。社会的な成功などという通俗的なものに何の意味があるのか。愛こそすべてなのだから。このように考えて、社会の落ちこぼれであることを喜ぶ恋愛主体は、意図せずして社会的役割、分類から自由になるのだ。恋愛感情は、現代社会の主流をしめる支配的な価値観、権力者の価値観によって抑圧されているうえ、いかなる分野からも相手にされることがない。だからこそ、孤立した恋愛主体を救いだし、その「子供」の情動を肯定することが必要であった。そこから『恋愛のディスクール・断章』が構想されたのだとバルトは述べていた。それは、見捨てられた孤独な恋愛主体が、おのが情熱を語ることでできる場を保証するために書かれた、というのだ。だが、それだけだろうか。

恋する人は単に無価値かつ無意味な存在であるのではない。恋愛の情熱の倒錯が原因で、恋する人は社会的拘束よりも私的なものに価値をおいており、権力に意義を見出さず、弱いものであっても構わないと思っている。これは、非常にラディカルな支配的モラルの否認である。そして、何よりもこの転覆行為を「手に負えない」ものとしているのは、恋する人には何の社会性——イデオロギーにもとづいた反逆や、政治的な闘争には社会性がつきものである——もないことである。恋する人が愚かで、馬鹿げていて、滑稽だからこそ、抑圧者はどうすることもできないのだ。

恋愛主体を語ることは、年齢や性別といった強制的に割り振られる社会的役割や区分にノンと言わんがための、このうえなく繊細なバルトの戦略でもあるのだ。

---

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 45.